人生の彩り 探し求めて

年の瀬に 2012

被災地から 中

米国ミシガン湖の近くにある全寮制の私立高校に通う小川彩加(あやか)さん(19)は、ただひとりの日本人留学生だ。

12月20日、記者がかけたインターネットを通じたテレビ電話に出た。夜の高校の廊下に座って大きな目をくるくるさせ、クラスメートとはしゃいでいる。

寮は個室。携帯電話はない。英語は今では日常会話に困らないが、つらいと思うことはよくある。でも、故郷で遭ったことを思えば、何でもない。

□　□

街が壊滅した岩手県大槌町の高校から帰宅する途中に地震が起きた。山火事のため孤立した集落で3日間、食べものを探し、がれきの中をさまよった。

祖父母、両親、姉。家族全員を亡くした。

数カ月後、おばと盛岡に洋服を買いに行った時はうれしかった。同時に悔しさがこみ上げた。「自分は家族も家も失った。きっと周りから『かわいそうな子』と思われてきたんだろうな……」

10月に一時帰国した際、被災県の若者と復興について議論する小川彩加さん＝東京都渋谷区、一般財団法人教育支援グローバル基金提供

転機は米国のルース駐日大使との出会い。震災から2カ月後、被災地のほかの若者と東京の公邸に招かれた。「君はアーティストなんだって？」。好きな絵の話をふられ、ほっとした。

昨年6月、高校を訪れた大使と再会した。「将来どうするの？」「働こうと思っています」「海外で進学するのもありじゃない？」。自分はこれからも生きていかなければいけないのだと思った。支援団体の留学プログラムを使い、今年6月、米国に渡った。

□　□

今は境遇を語ることもなければ、聞いてくる人もいない。この半年間は、「悔しさ」を和らげた。「何もかも嫌で、なぜ生き残っているのかわからなかった」という思いも消えた。

岩手県釜石市の墓に眠る家族とのつながりは、親戚にもらった写真くらい。家族は「毎日ふと思う」存在になった。日本や故郷をどう思うか、まだ整理がつかない。自分がどう生きていくかをまず考えている。

そんな時、母が教えてくれた名前の由来を思い出す。「彩りを加えていく人生に」。とどまっていちゃだめだと思う。留学は1年。その後はファッションデザインの勉強がしたい。

新たな年が来て震災から2年を迎える。「あの震災は何だったんだろう」と思うこともある。ただ、はっきり分かることがある。生きたくても生きられなかった人がたくさんいた中で私は生きている。現実を見つめていきたい。

（国吉美香）